

矢野の古墳発掘調査報告書

2004. 3

徳島市教育委員会
徳島市史跡調査整備委員会

矢野の古墳発掘調査報告書

2004. 3

徳島市教育委員会
徳島市史跡調査整備委員会

例　　言

1. 本書は、県指定史跡「矢野の古墳」の保存と活用の図るために実施した発掘調査の報告書である。
2. 矢野の古墳は、徳島市国府町西矢野に所在する。
3. 本事業は、平成15年度徳島県緊急地域雇用創出特別基金事業として徳島市から委託を受け、徳島市史跡調査整備委員会が実施した。なお、調査にあたっては、徳島市教育委員会が指導及び助言を行った。
4. 調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調査期間 平成15年5月6日～平成15年10月24日
調査面積 約35m²
5. 本報告書の編集・執筆は、徳島市教育委員会社会教育課下田順一が行った。
編集は、徳島市教育委員会が行った。
6. 本書の造構写真と遺物写真は、下田が撮影した。
7. 発掘調査で得られた遺物、その他の資料は、全て徳島市教育委員会が保管している。
8. 本文の挿図として、国土地理院発行5万分の1地形図「石井」および徳島市都市計画図2,500の1「徳島市都市計画図」を一部改変して使用した。
9. 本報告書の高度値は海拔高（T.P.）を表し、第1図の方位は真北を表し、他の図面の方位は磁北を表す。
10. 土層と出土遺物の色調については、『新版標準土色帖』を用いた。
11. 調査全般にわたって、下記の関係諸機関並びに方々から格別の指導・助言をいただいた。感謝の意を表します。
徳島県教育委員会文化財課、財徳島県埋蔵文化財センター、徳島県立博物館、徳島大学、東瀬氏、石井伸夫氏、藏本晋司氏、小林勝美氏、定森秀夫氏、白石太一郎氏、菅原康夫氏、高島芳弘氏、辻佳伸氏、早瀬隆人氏、福家清司氏、藤川智之氏
12. 調査にあたって、徳島市開発部公園緑地課及び矢野文化財保護会には種々の協力を賜った。感謝の意を表します。

本文目次

例　言

報告書抄録

第1章　調査に至るまでの経緯、調査等の経過・体制	1
1　調査に至るまでの経緯	1
2　調査等の経過と体制	1
第2章　地理的環境と歴史的環境	3
1　地理的環境	3
2　歴史的環境	3
第3章　調査の成果	6
1　古墳及び周辺の調査前の状況	6
2　第1トレンチ	6
3　石室	7
4　出土遺物	14
第4章　発掘調査後の整備	14
第5章　まとめ	15
附　篇　第2トレンチ	15
出土遺物観察表	
写真図版	

挿図・表目次

第1図	主要遺跡の分布図 (S=1/25,000)	3
第2図	古墳及び周辺の地形測量図 (S=1/300)	
第3図	トレンチ配置図 (S=1/200)	5
第4図	第1トレンチ平面図、北東壁面図 (S=1/50)	6
第5図	第1遺構面平面図、断面図 (S=1/50)	
第6図	石室実測図 (S=1/50)	9・10
第7図	土層図 (S=1/60)	11
第8図	遺物の出土位置図 (S=1/50)	14
第9図	第2トレンチ平面図、北側壁面上土層図 (S=1/50)	15
第10図	出土遺物実測図	17
第11図	出土遺物実測図	18
第12図	出土遺物実測図	19
出土遺物観察表		20~23

写真図版

図版一	古墳遠景 (南東方向から)、石室開口部 (南から)
図版二	玄室・前室 (南から)、玄室の東側壁・奥壁 (南から)
図版三	玄室の西側壁 (南から)、玄室・前室の東側壁 (北から)
図版四	玄門石、前室、玄室の東側壁 (北から)、第1遺構面全景 (西から)
図版五	石室内 (西側壁、東側壁、奥壁、床面、天井部)
図版六	前室床面の遺物出土状況 (写真の左側が玄室側、右側が羨道部側)、須恵器出土状況、金環出土状況
図版七	第1トレンチ土層西壁面、第2トレンチ全景 (西から)
図版八	出土遺物 (1~10、13、14)
図版九	出土遺物 (15~18、21~25、28、32)
図版十	出土遺物 (33~38、40、41、43、46)
図版十一	出土遺物 (45、47~59、62、63、65)

報告書抄録

ふりがな	やののこふんはつくつちょうさはうこくしょ						
書名	矢野の古墳発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	下田順一						
叢書機関	徳島市教育委員会・徳島市史跡調査整備委員会						
所在地	〒770-8571 徳島県徳島市幸町2丁目5番地				TEL 088-621-5419		
発行年月日	西暦2004年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 度	東 經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
やののこふん 矢野の古墳	徳島市国府町 にしやののこふん 西矢野山林40	36201	34度 3分 38秒	134度 28分 5秒	20030506～ 20031031	35	遺跡整備のための発掘調査、 確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
矢野の古墳	古墳	古墳時代	墳丘、複室構造の横穴式石室		須恵器、土師器、 銅製品、金環、ガラス小玉、埴輪	円墳	

第1章 調査に至るまでの経緯、調査等の経過・体制

1. 調査に至るまでの経緯

矢野の古墳は、昭和28（1953）年に徳島県指定史跡に指定されている。築造後、様々な自然災害等を受けながら現在に至ってきている。当古墳は、未だ石室内の発掘調査が行われたことがなく、副葬品及び床面構造も不明である。そのため、築造年代の把握にも限界があった。また、近年、墳丘東側の封土の流出が著しく、石室側壁の崩落も危惧される状況であった。そこで徳島市教育委員会では、徳島県緊急地域雇用創出特別基金事業を活用して、同古墳の発掘調査を実施することによって、同古墳の性格を把握し、応急的な保護策をとり、かつ、安全に古墳見学ができるような簡易な整備を行うこととした。この事業は、徳島市教育委員会の指導のもとに、徳島市史跡調査整備委員会が、徳島市の委託を受け実施した。

矢野の古墳については、これまで以下のような調査が行われている。

第1次調査（測量調査）

昭和46（1971）年から徳島県博物館（現：徳島県立博物館）が県内の県指定となっている古墳を中心に実測調査を行った¹⁾。矢野の古墳は、昭和47（1972）年2月29日～3月9日に、墳丘測量及び石室の実測調査を実施している。

第2次調査

徳島市開発部公園緑地課が、矢野の古墳の南側に公園園路を設置する計画を明らかにしたことを受け、園路工事が古墳にどのような影響を与えるかを確認するため、徳島市教育委員会は、平成11（1999）年6月2日～7月5日に、墳丘及び周辺の地形測量、トレンチによる範囲確認のための発掘調査を実施した²⁾。

（註）

- 1) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相」『徳島県博物館紀要』第4集 昭和48（1973）年3月
発行 徳島県博物館
- 2) 下田順一「矢野の古墳」『徳島市埋蔵文化財報告書12』平成12（2000）年3月

2. 調査等の経過と体制

（1）調査等の経過

調査等の内容は、以下の通りである。

平成15（2003）年

- 4月1日 「史跡の調査及び整備に関する業務等」の委託契約を徳島市長小池正勝と徳島市史跡調査整備委員会との間で締結した。
- 5月6日 発掘調査開始。発掘区、トレンチの設定。
- 5月9日 転落した天井石の移動。
- 5月12日 第1トレンチの掘削開始。
- 5月16日 羨道部及び前室部の掘削開始。
- 5月20日 石室の実測開始。
- 5月29日 第1トレンチ埋め戻し。墳丘盛土の流出が著しく、危険な箇所の復元整備開始。
- 6月12日 前室部の西側の板石を検出。

- 6月20日 玄室の掘削開始。
- 7月30日 前室部の東側の板石を下部まで検出。前室部の存在を確認。
- 10月10日 第2トレンチの掘削開始。
- 10月22日 義道部南端の入口確認のための掘削開始。玄室から順次埋め戻し開始。
- 10月24日 義道部南端の入口を確認。
- 10月30日 危険防止用の杭の打ち込み開始。
- 10月31日 埋め戻し終了。石室への導入路用の階段の設置。
2トレンチでの確認作業終了。古墳の可能性はなく、近世の擾乱を受けていることを確認。第2トレンチの埋め戻し終了。
- 11月19日 発掘調査成果発表に係る事前の記者発表。
- 11月22日 一般向け発掘調査成果発表及び講演会を開催。(参加者は約100名)
- 平成15(2003)年6月～平成16(2004)年3月 徳島市文化財整理室において遺物の整理作業及び報告書の作成。

(2) 調査体制

本調査業務に係る組織体制及び関係者を列記する。

徳島市教育委員会

教育長 柏木雅雄

教育次長 高橋義治、二木康弘

社会教育部

課長 河野康子

課長補佐 中山信彦

文化財係長 澄山雄一

主任 勝浦康守、三宅良明

指導主事 下田順一

徳島市史跡調査整備委員会

会長 山本彰一

副会長 森儀市

理事 勝野昭、中川雍久、越博文

監事 泉隆治、井村アイ子

発掘調査担当調査員 倉佐晃次、佐伯俊裕

整理作業担当調査員 市川欣也、高木淳、中野勝美

発掘調査担当調査補助員 青木健司、谷水保、吉田範次、脇田光行

整理作業担当調査補助員 折野絵美、露口啓子、中西洋子、宮浦京子、吉田祐子

第2章 地理的環境と歴史的環境

1. 地理的環境

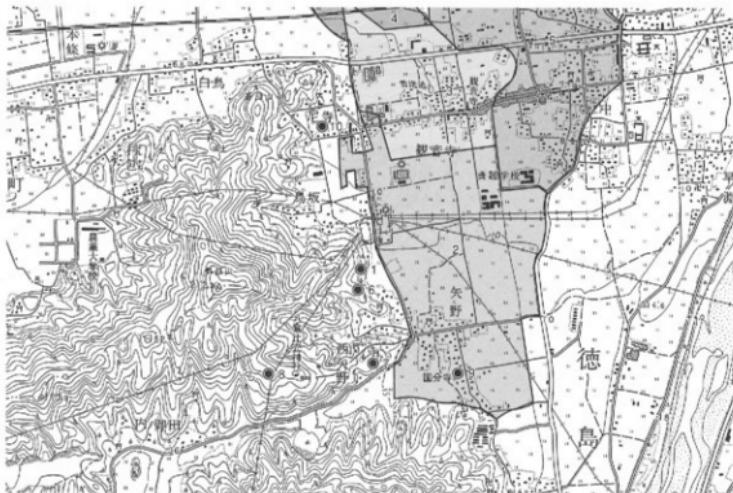
矢野の古墳の所在する徳島市国府町西矢野は、徳島市の西部に位置しており、名西郡石井町と隣接する。この地区には、南西から北東に向かって流れる鮎喰川の沖積平野が広がり、当古墳が所在する気延山（標高213.3m）や辰ヶ山（標高197.2m）の山塊が、この地域の大部分を占めている。

2. 歴史的環境

矢野の古墳の東側には、国指定重要文化財の突線袈裟樽文銅鐸（「矢野銅鐸」）が出土した矢野遺跡（縄文時代～中世の集落・官衙）や、觀音寺遺跡（弥生時代～中世の集落・官衙・城跡）がある。また、当古墳が含まれる気延山古墳群には、奥谷1号墳、宮谷古墳、八倉比売神社1号墳・2号墳をはじめ多数の古墳が所在し、県下最大の古墳群を形成する。また、当古墳の北西部の名西郡石井町内には、日枝神社古墳群やひびき岩古墳群がある。古代の遺跡としては、当古墳の南東部に阿波國分寺跡（県指定史跡）、北西部の名西郡石井町内に阿波國分尼寺跡（国指定史跡）がある。第16番札所觀音寺周辺において、阿波國府跡所在確認調査を、徳島市教育委員会が継続して実施している。

中・近世の史跡には、矢野城跡や阿波國分寺庭園（国指定名勝）等が知られている。

他に、延喜式大社の天石門別八倉比売神社や、現在も「府中の宮」として親しまれている延喜式内社の大御和神社がある。

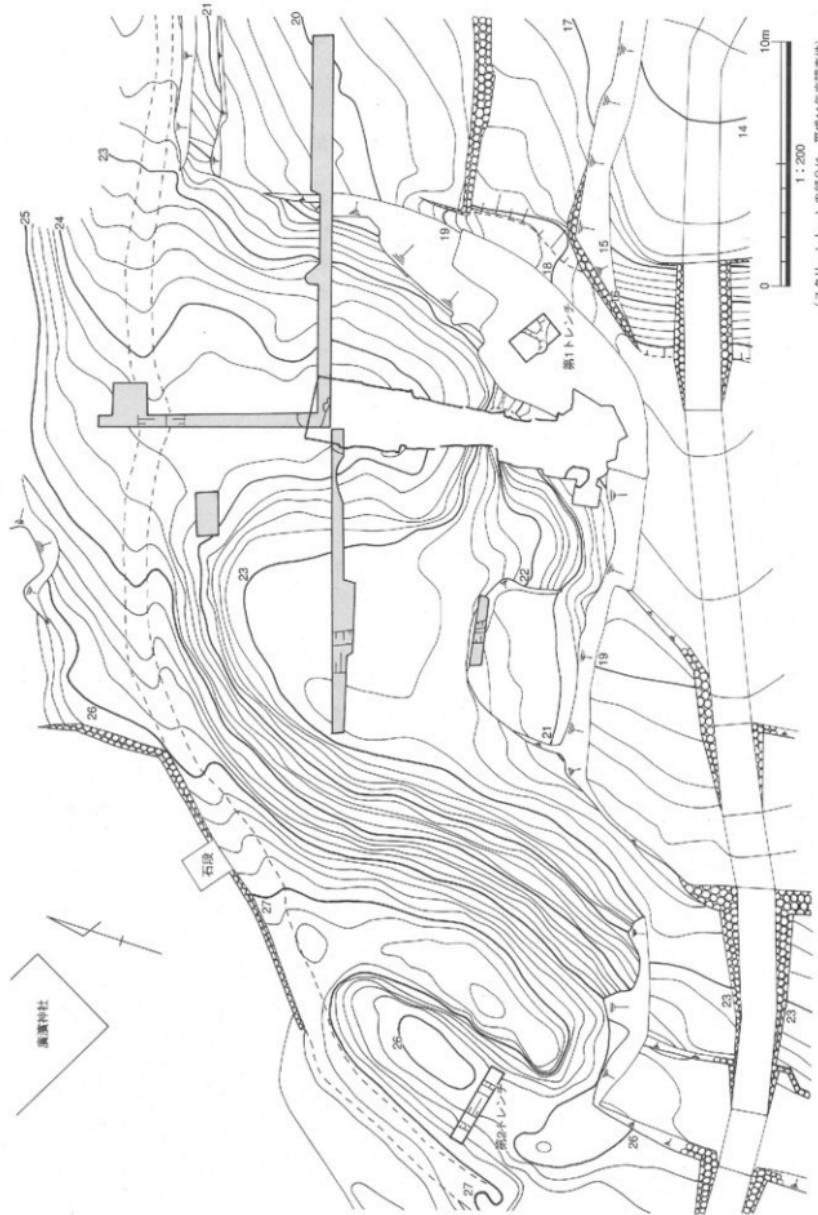


第1図 主要遺跡の分布図（1：25,000）

1. 矢野の古墳
2. 矢野遺跡
3. 觀音寺遺跡
4. 敷地遺跡
5. 府中遺跡
6. 奥谷1号墳
7. 宮谷古墳
8. 八倉比売神社1号墳・2号墳
9. 阿波國分寺跡・阿波國分寺庭園
10. 阿波國分尼寺跡



第2図 古墳及び周辺の地形測量図



第3図 トレンチ配置図

第3章 調査の成果

1. 古墳及び周辺の調査前の状況（第2図、第3図）

矢野の古墳の存在する尾根は、吉野川の支流の一つである鮎喰川から西へ約2km離れた所にある気延山（山頂標高213.3m）の東側にある。矢野の古墳は、この気延山の山頂から東方向に延びる尾根の先端に近い南斜面に位置する。古墳の北西方向には廣瀬神社が鎮座している。古墳の周辺は、畑として開墾されたり、後世の削平も受けしており、特に、古墳の南側は開墾等による地形の変化が著しく、南側の墳裾部付近は大きく削られている。現在、徳島市の阿波史跡公園の一部となり、古墳の南側には園道が整備されている。しかし、古墳の周辺は、雑木と竹が混在し、その間に説明板が立てられている。また、石室は以前から開口しており、入口には天井石と思われる石材が転落して露出していた。さらに、墳丘東側の封土の流出が著しく、石室の一部も崩落の可能性があった。

調査にあたっては、1999年の徳島市教育委員会の発掘調査の結果を踏まえ、地形測量図の一部を追加修正し、さらに新たに調査区を設定して、発掘調査を開始した。

調査以前から露出していた縁泥片岩の巨石は、その大きさから天井石の可能性があるが、後世の攪乱を受け、現位置を保っていないと判断されるので、発掘調査を始める際に移動した。

2. 第1トレーニング（第3図、4図、図版七）

墳丘は現地及び地形測量図において確認でき、標高23m～24m前後の等高線が古墳の周辺で外側に湾曲しており、明らかに自然地形と異なっている。1999年の発掘調査から玄門部の中心を古墳の中心とする、直径17.5mの円墳が想定されている¹⁾。

墳丘の東側に、崩れの著しいところがある。このままでは、墳丘が崩壊する危険があるので、土留めをする必要があった。そこで、事前に、墳丘の遺存状況等を確認するために、第1トレーニングを設定した。

土層（第4図）の観察により、築造工程を復元する。まず最初に、土層23の地山を削り、2段の平坦面を形成していた。この内上段の平坦面上に、一辺が約30cm、厚さ約15cmの石材が不規則に置かれていた。その後、上段の平坦面上に版築（土層15～22）を行った。



第4図 第1トレーニング平面図、北東壁面図

行っている。さらに、下段の平坦面上に、版築（土層5～14）を行っている。これら版築の上に、盛土（土層2～4）が行われている。土層1は、縮まりがない。よって、これは盛土が崩れたことにによって堆積した層であると判断した。

註) 下田順一 「矢野の古墳」『徳島市埋蔵文化財概要報告書12』平成12年3月

3. 石室（第5図～第8図、第10図～第12図、図版一～図版六）

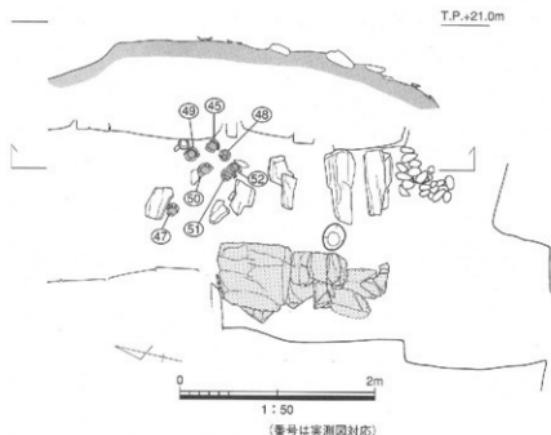
(1) 発掘調査の経過

両袖式の横穴式石室で、南側に開口する。前室及び羨道部の残存状況は相対的に悪い。特に、前室及び羨道部の西側壁は、石室の外側からの圧力により、内側にはらみ出している。このため、石室の崩壊を防ぐために、羨道部の調査は、西側壁側の埋土を残して掘削を進めることにした。また、羨道部の天井石は残っていなかったが、羨道部の天井石と考えられる石が、羨道部の中央付近に転落していた。これは、先述した通り、発掘調査の妨げになるので移動した。さらにこの下から、転落した石材を検出した。これらも移動した。この後、石室への流入土を徐々に下げていく中で、第1遺構面を検出した。詳細については、後述するが、出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。そしてさらに石室の床面まで掘り下げ、石室の床面構造についても調査を行った。なお、玄室及び玄門付近の堆積土は、籠に掛けて内容物を選別した。後世の開墾によって、墓道や前庭部はほとんど削られてしまっている。調査成果に関しては、後述する。

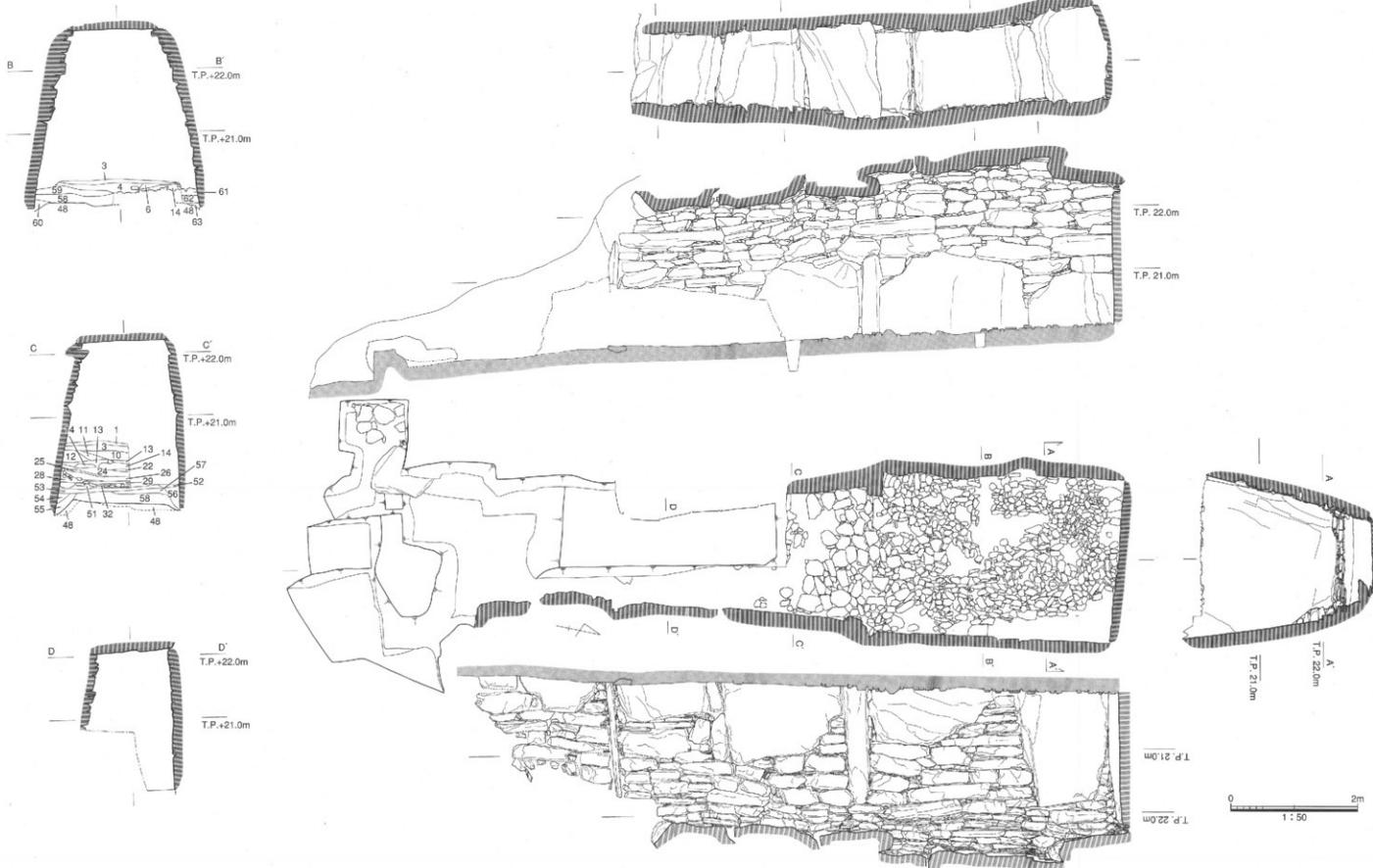
(2) 第1遺構面（第5図、第11図、図版四）

転落した天井石他の石材や流入土を除去したところ、第1遺構面を検出した。この遺構面は、羨道部の西側壁の崩れた石材と、羨道部及び前門付近の東側壁の間で検出した。

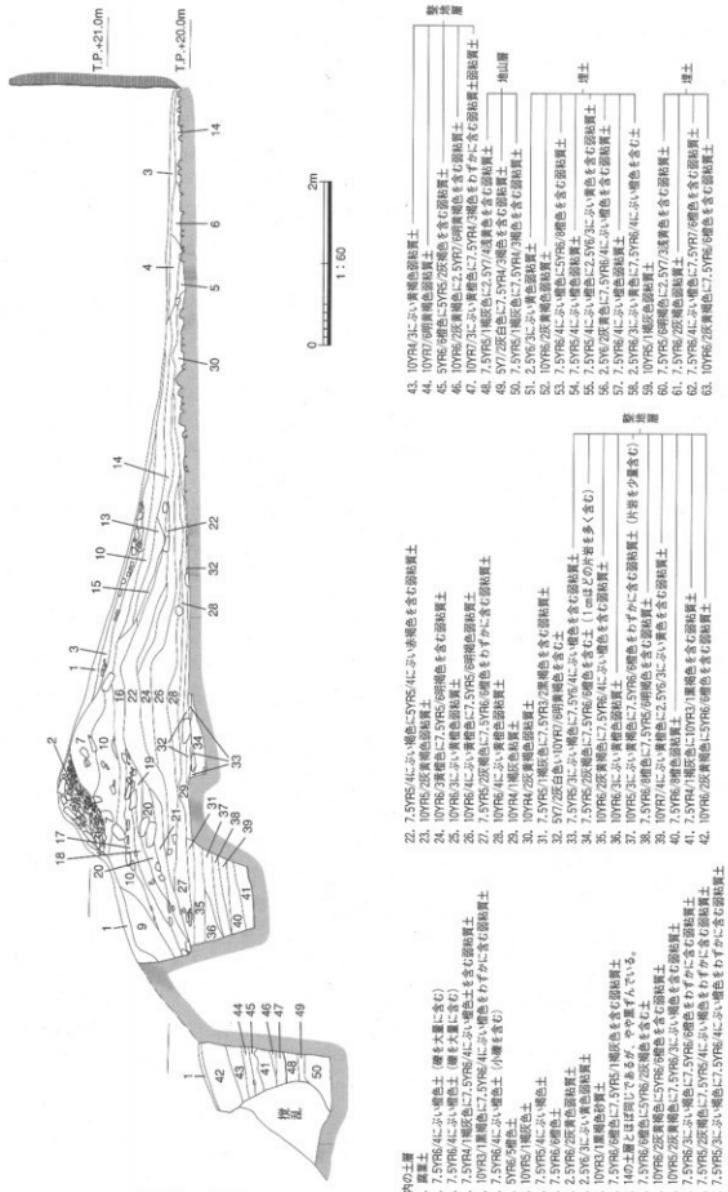
羨道部東側壁の遺存している南端からさらに南側の場所に、長さ約15cm前後の楕円形の碟が羨道部埋土の斜面上に並べられていた。これらの碟と石室東側壁面の間に土師器（53）の小壺が出土した。



第5図 第1遺構面平面図、断面図



第6図 石室実測図



第7図 土層図

また、これらの砾に隣接して、長さ約70cm程の緑泥片岩の板石2枚が、斜面上に階段状に並べられていた。さらに、ピットを1個検出した。この東側には、石材が不規則に並べられていた。石室の前室及び前門石付近の埋土の最も高い場所に、7個の土師器の杯(45、47~52)が出土した。これらの土師器は、底部を上にしたものや下にしたものがあり、また、並べ方については、規則性は認められなかった。さらに、保存状態が悪く、完形のものではなく、薬剤によって固めながら取り上げた。

(3) 第2道構面(石室の床面)と石室の構造(第3図、第6図~第8図、図版一~図版六)

複室構造の両袖式の横穴式石室である。全長約11.5mで、南に開口している。玄室及び前室の前門付近までは、天井石や側壁が比較的良く遺存している。しかし、羨道部の天井石は失われている。また、羨道部の東側壁半分程も失われ、同じく西側壁の下半分は、墳丘からの土圧のために傾いており、原位置を保っていない。さらに、西側壁の上半分は失われている。

①玄室

奥壁は一枚の巨石を垂直に立てている。奥壁の北東隅は、攪乱部分である。玄室の主軸は磁北から約10度西に傾く。長さ約3.8m、幅約2.65m、天井石までの最高位は約2.68mである。平面プランは、長方形になっている。床面には、比較的大きさの揃った川原石が敷きつめられている。少數ではあるが、割石も使用されている。並べ方については規則性は認められなかった。東西の玄門石周辺では、板石を床面に敷きつめている。この板石の上から集中して須恵器が出土した。また、土層の観察から、地山の土層48を整形し、掘り方をつくり、石材を据えていること、土層58, 60~63は、埋土と床面の整地層であることが判明した。

②前室

長さ約3.8m、幅は、玄門石側で約2.2m、前門石側で約1.4m、高さ約2.25mである。平面プランは、東側壁側は玄室からほぼ真っ直ぐであるが、西側壁側は、羨道部に向けて徐々に狭まる台形となっている。敷石は、玄門石付近に見られ、前門石付近ではわずかであり、抜き取られた可能性がある。また、土層の観察から、地山の土層48を整形し、掘り方をつくり、石材を据えていること、土層52~58は、埋土と床面の整地層であることが判明した。土層51直上の板石は、敷石である。

③羨道部

天井石が失われているために、天井部付近の構造は不明である。東西の側壁面共に遺存状態が悪い。東側壁は、長さ約2mが遺存している。西側壁は、羨道部内側に腰石が傾いているが、原位置に近い場所を保っている。西側壁南端の腰石から約50cm程離れた場所に、墳丘斜面に不定形の板石が並べられていた。このような石材は、これまで行った墳丘の発掘調査では検出していない。よって、これらは、開口部付近にのみ施された葺石の一部と考えられる。また、羨道部西側の南端に置かれた石は、古墳の開口部を表すと考えられる。平面プランは、東側壁側は、玄室及び前室に真っ直ぐにつながる。しかし、西側壁側は、前門石から徐々に広がっている。第6図の断面D-D'の付近で板石を検出したが、敷石かどうかは不明である。また、土層の観察により、土層52~41が床面の整地層であることが判明した。他には、土師器の杯(54, 56)の2個体が、石室床面近くで出土した。このうち、土師器(56)の周辺に、焼土が広がっていた。

④構築の方法

玄室から石積みが行われている。石室の構築方法は、直方体の緑泥片岩の石材を、縦方向の面が石室の側壁面に出るように積み上げることを基調としている。そして、横目地は6段あり、比較的明瞭に観察できる。石室の実測図(第6図)から分かるように、玄室の壁面は、天井部に近づくに

従って内傾しており、天井部も中央部が最も高くなるように構築している。以上のように、玄室は持ち送り技法を用いて構築している。前室の壁面は、ほぼ垂直に構築しており、持ち送り技法は使用されていない。羨道部の壁面の構築方法は、遺存状態が悪く不明である。使用している石材は、主として割り石である。問には、川原石も詰められている。

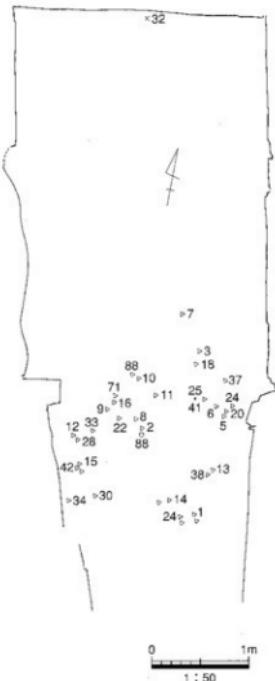
次に、比較的遺存状態のよい東側壁から観察していく。玄室の東側壁は、奥壁を立ててから、この奥壁に近い腰石を縦位に据えている。玄門石に近い腰石は横位に据えている。これら二つの腰石の間に、玄室西側壁の長さとの差を調整するためと思われる、1石を据えている。その次に、玄門石を立てている。この後に、玄門石に近い、玄室の腰石とはほぼ同じ高さの腰石、さらにこの半分の高さの腰石の2石を共に横位に据えている。これら2石の間に、石材を縦方向に落とし込んでいる。この後、前門石に板石を使用して立てている。前門石に近い羨道部の腰石は、横位に据えている。ただし、上からの重さに耐えきれず石室内に傾いている。このように傾いていることから、この石材の厚さが前門石とは同じ厚さであることが分かった。

以上のように、石室の規模を確定する基底石が据えられてから、第1段目の積み石を行っている。玄室と前室の第1段目の高さは、玄門石を挟んで据えられている2つの腰石のそれぞれの最高位に合わせている。羨道部についても、横日地を観察するとほぼ同じ高さでそろえられていることが推測できる。次に、玄門石・前門石の最高位に合わせるように、石材をそろえながら積み上げ、玄室・前室の第2段目としている。羨道部は、この高さの付近の石材が失われているために不明である。第3段目は、奥壁に近い腰石の最高位に合わせるように、積み上げている。第4段目は、奥壁の最高位に合わせるように、積み上げている。この第4段目を積み上げた後、天井石を懸け、高さを調節しながら、続いて前室の天井石を架けている。そして、第5段目を積み上げていく途中で、奥壁に近い天井石を1石架けている。玄室の大井部の最も高い所までは、今までのものとは違い、比較的薄い石材等を使用して第5段目を積み上げている。最後に第6段目として小さな石材を詰めながら高さを調節し、天井石を2石架けて仕上げている。

次に、西側壁を観察していく。玄室の西側壁は、奥壁に使われている石材を立ててから、僅かに高さの異なる2つの石材を横位に据えている。その後、玄門石と前室の腰石を据えている。これらの石材はほぼ同じ最高位にそろえている。この後、前門石に板石を使用して立てている。前門石に近い羨道部の腰石は、上からの重さに耐えきれず石室内に傾いているため、本来の高さ等は不明である。しかし、このように傾いていることから、この石材の厚さが東側壁の前門石よりやや厚いことが分かった。

以上のように、石室の規模を確定する基底石が据えられてから、第1段目の積み石を行っている。第1段目は、玄室・前室の腰石、玄門石の最高位がそろいうように、積み上げている。玄室・前室の第2段目は、東側壁にある玄門石の最高位に合わせるように、積み上げている。第3段目は、東側壁の奥壁側の腰石の最高位に合わせるように、積み上げている。玄室の第4段目は、奥壁の最高位に合わせるように、積み上げている。この第4段目を積み上げた後、天井石を懸け、高さを調節しながら、続いて前室の天井石を架けている。そして、第5段目を積み上げていく途中で、奥壁に近い天井石を1石架けている。玄室の天井部の最も高い所までは、今までのものとは違い、比較的薄い石材等を使用して第5段目を積み上げている。最後に第6段目として小さな石材を詰めながら高さを調節し、天井石を2石架けて仕上げている。

最後に、奥壁を観察していく。まず、最初に一枚の大きな石材を縦位に据えている。続いて、この最高位に合わせるように石材を詰めながら第1段目としている。第2段目は、奥壁に近い天井石



第8図 遺物の出土位置図

を架けるために、比較的薄い割石を積み上げている。

4. 出土遺物（第10図～第12図、図版八～図版十一）

石室内を調査中と第2トレンチ調査中に、遺物が出土した。今回は、石室内を調査中に出土した遺物を記述する。

1～31、33～35、37～44、46が、石室内を調査中に、玄門石付近の玄室と前室の床面直上で出土した。32のみ奥壁で出土した。須恵器から年代を推定するならば、古い形式のタイプである33、34、37があることから、この矢野の古墳は、6世紀後半～7世紀中頃まで使用されていたと考えられる。

36の埴輪片は前門石付近の流入土を取り除いている最中に出土している。今までの墳丘調査では、埴輪は出土しておらず、この古墳に伴うものとは考えにくい。

45、47～53は、第1遺構面検出した際に、出土した。平安時代に、この古墳が利用されたときの遺物と考えられる。54は、前門石付近の前室の床面に近いところで底部を上にして出土しており、上記の土師器よりも古い可能性がある。56も、同様に底部を下にして出土した。また、この56の周辺に焼土が広がっていた。

58～60は、羨道部の床面を断ち割った際に、土壤を検出し、その埋土中から出土した。

55、57、61～65、90、91は、羨道部を調査中に、表土等を除去中の第1遺構面に達する前の流入土中から出土しており、遺構とは全く関係がない。

66～87は、玄室内で流入土を除去中に出土した。88は、前室の床面直上から出土した。89は、玄室内の流入土を鋤にかけて選別中に出土した。

第4章 発掘調査後の整備

1. 墳丘

墳丘の東側のうち、特に石室の開口部付近の崩れの著しいところに、発掘調査後土留めを行う必要があった。事前に墳丘の遺存状況等を確認した結果、盛土及び版築を検出した。そこで、盛土及び版築を保護し、石室の崩壊を防ぐために、エコ土嚢を使用して、新たに購入した山土を充填した。

2. 移動した石材

石室の開口部に転落していた羨道部の天井石は、移動して、見学できるようにした。移動先は、墳丘の外側にあたる、古墳の説明板の北側にある小さな広場である。また、見学者の安全確保のために、長さ約2mの杭を打ち込み、ロープで囲っている。

3. 石室

発掘調査後の埋め戻しについては、床面を保護するため、砂を厚さ約10cm程入れてから埋め戻しを行った。埋め戻しには、発掘調査中に搬出した土と新たに購入した山土を使用した。

石室は、砂を入れた上に、さらに厚さ約10cmの山土を入れた。その後、原位置を保っていなかった敷石を使ってこの山土の上に並べた。これにより、当初の床面の雰囲気に近づけた。

前庭部は開墾のために削平を受け、全く残っていない。このため、石室内の見学用通路として、以前から県道部西側の側壁の崩れた部分が使いやすいこともあり、利用されてきた。今回も、この部分を利用した通路を設定した。ただし、発掘調査によって流入土を搬出したために、傾斜角度が急になつたので、これを解消するため、埋め戻しを行った後、土留めと通路用に、長さ60cm程の杭を使って、階段を設置した。

第5章 まとめ

今回の調査により、矢野の古墳について明らかになった点は、以下のとおりである。

古墳の構造は、南側に開口する、複室構造の両袖式の横穴式石室であった。使用している石材は、緑泥片岩である。また、構築の方法は、次のとおりである。玄室の壁面を持ち送り構造とし、天井部も持ち送り構造としている。前室の壁面は垂直であり、天井部も水平である。

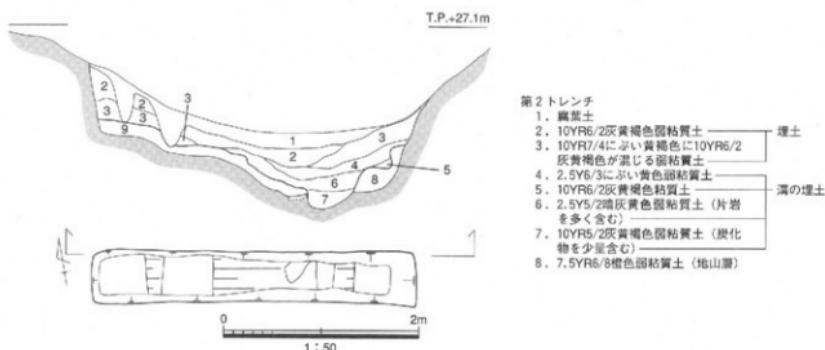
築造年代は、出土遺物から、6世紀後半であり、7世紀中頃まで追葬が行われた。

県道部では、平安時代に利用された遺構を検出した。板石を階段状に配置し、土師器を埋土の最も高い地点に置いていることから、この遺構は、なんらかの祭祀に使用された可能性があると考えている。

附篇 第2トレンチ（第9図、図版七）

（1）発掘調査の経過

矢野の古墳の墳頂部から見て、西の方角約26m離れた場所に、凹地がある。この凹地と、矢野の古墳の墳頂部との比高差が約3mであること。南側に開口した石室の残骸のようであること。これらのことから、古墳跡の可能性が以前から指摘されてきた。そこで、古墳であるかを確認するために、

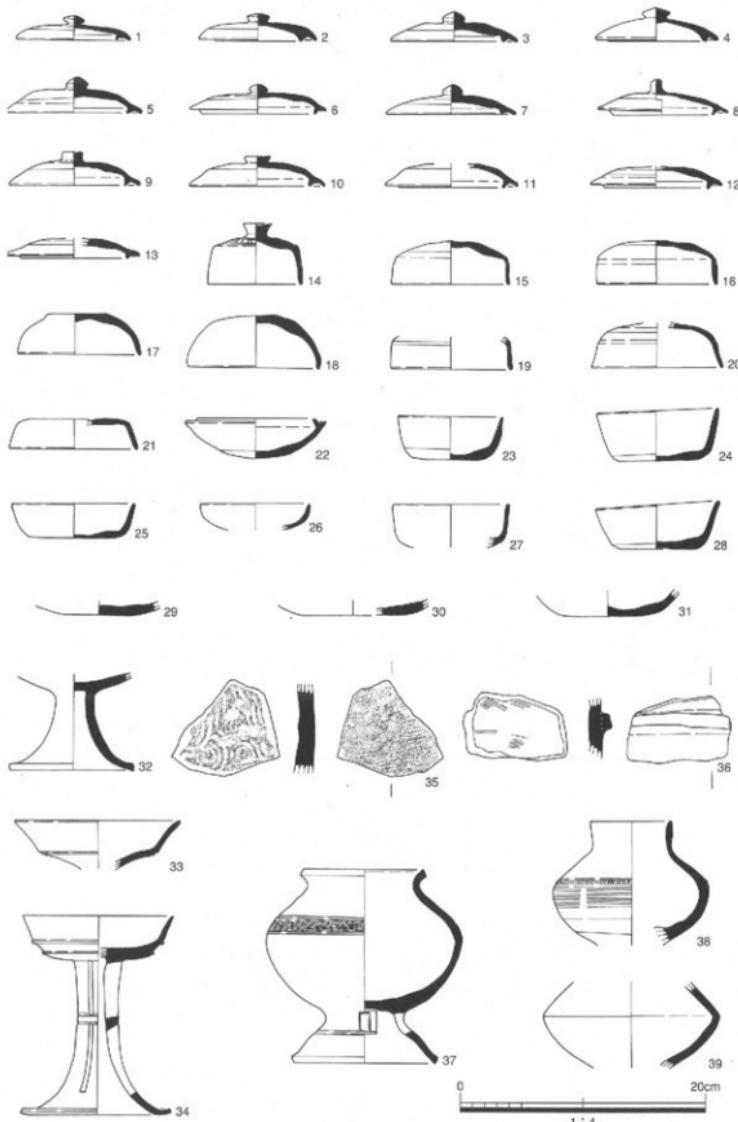


第9図 第2トレンチ平面図、北側壁面土層図

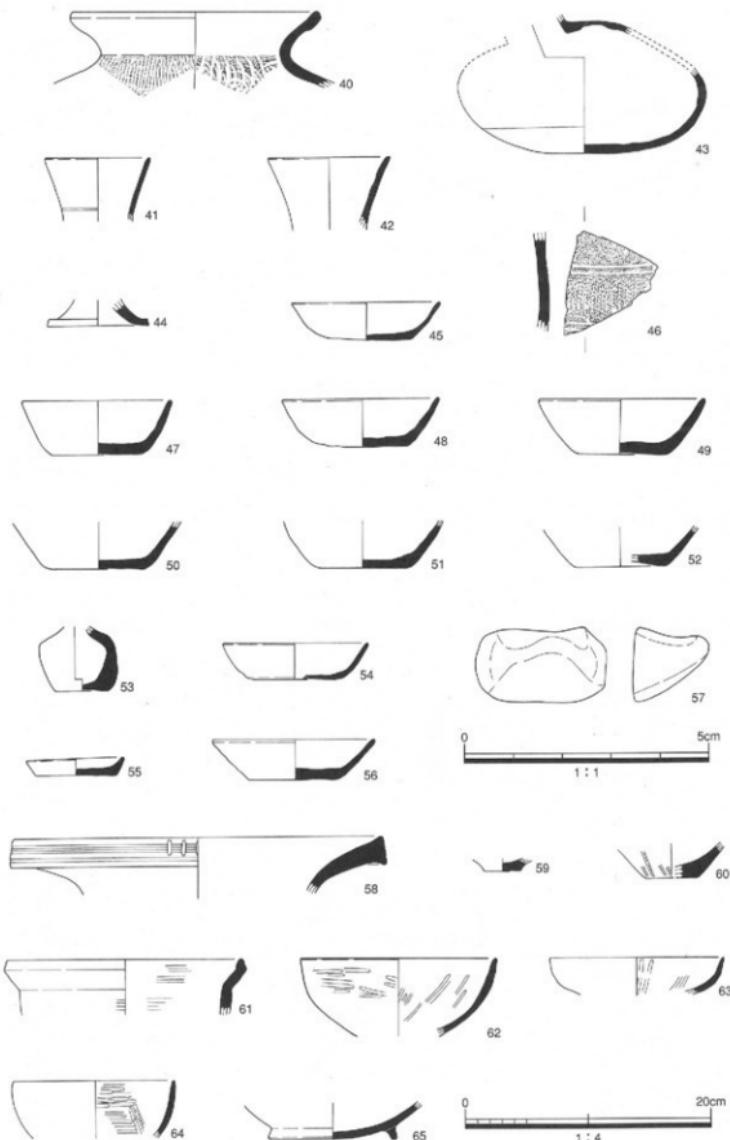
凹地を縦断する東西方向のトレンチを設定し、発掘調査を行った。

(2) 発掘調査の成果

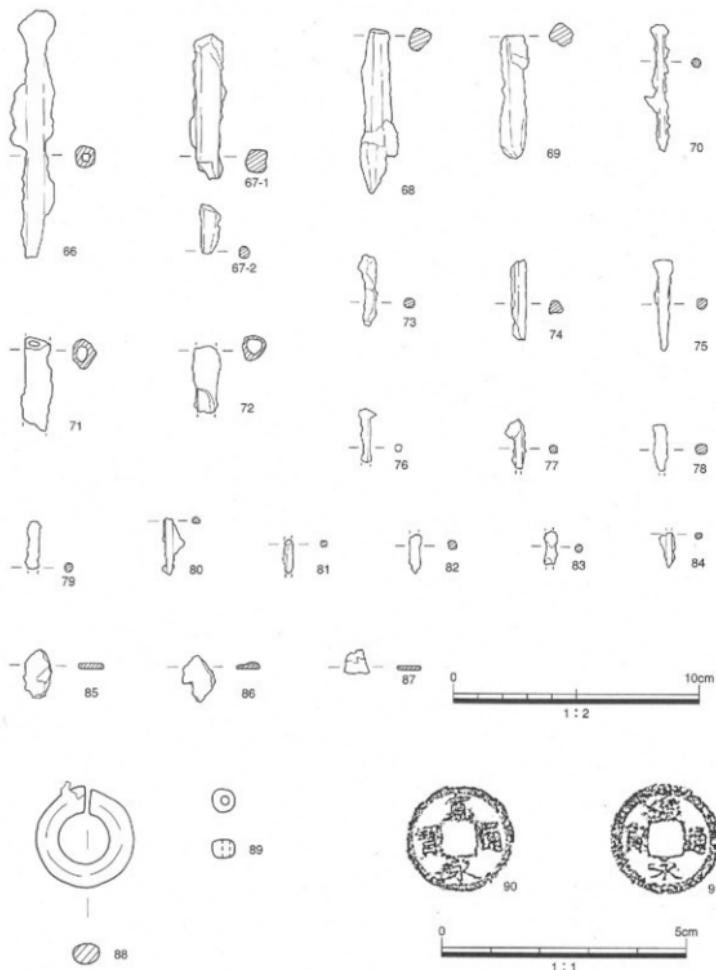
トレンチの東端から3段の平坦面、西端から1段の平坦面を造るように地山を掘り込んでいる。これらの平坦面は、それぞれ高さが異なっている。よって、これらの地山の掘り込みは、側壁を据えるための掘り込みではない。また、最下段の平坦面に、南北方向になる溝と考えられる遺構を検出した。土層の堆積状態と出土遺物から、土層1~3は、近世の磁器や瓦の破片を多量に含んでいることから、後世の擾乱層である。土層4~7は、溝と考えられる遺構の埋土である。以上のことから、この凹地は、時代不明の溝を含む遺構であると判断し、古墳に関連する遺構ではないとの結論に達した。



第10図 出土遺物実測図



第11図 出土遺物実測図



第12図 出土遺物実測図

出土遺物観察表（番号は出土 法量の器高の（ ）は残存高。）

番号	器種	法量(cm)			胎土	色調		形態・手法の特徴		備考
		内径	器高	底径		内面	外面	内面	外面	
1	須恵器(蓋)	18.6	2.0	—	密	7.5Y6/1灰褐色	N6/灰色	回転ナデ 天井部、回転ナデ後ナ デ回転	回転ヘラケズリ(ロク 口右) 回転ナデ	
2	須恵器(蓋)	9.6	2.2	—	やや密	N6/灰色	N6/灰色	回転ナデ 天井部、ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転)	自然釉
3	須恵器(蓋)	10.4	2.4	—	やや密	N6/灰色	10YR5/1褐色	回転ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転) 回転ナデ	自然釉 つまみ
4	須恵器(蓋)	10.1	2.8	—	密	7.5Y5/1灰褐色	10Y5/1灰褐色	回転ナデ 天井部、ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口左回転) 回転ナデ	つまみ
5	須恵器(蓋)	10.9	2.8	—	密	5Y6/1灰褐色	5Y7/1灰褐色	回転ナデ 天井部、ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	自然釉 つまみ 発泡あり(2次焼成 のためか、部分的に 剥がれています)
6	須恵器(蓋)	11.4	2.5	—	密	2.5Y6/1灰褐色	N6/灰色	回転ナデ 天井部、ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転) 回転ナデ	つまみ
7	須恵器(蓋)	10.4	2.5	—	密	2.5Y5/1 黄灰色	N6/灰色	回転ナデ 天井部、ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転) 回転ナデ	自然釉 つまみ
8	須恵器(蓋)	10.5	3.0	—	精良	N6/灰色	N6/灰色	回転ナデ 天井部、ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転) 回転ナデ	つまみ
9	須恵器(蓋)	10.6	2.8	—	密	N6/灰色	N6/灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転) 回転ナデ	つまみ
10	須恵器(蓋)	11.0	2.5	—	精良	N6/灰色	N6/灰色	回転ナデ 天井部、ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転) 回転ナデ	
11	須恵器(蓋)	10.7	(1.9)	—	密	N4/灰色	N5/灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口左) 回転ナデ	
12	須恵器(蓋)	10.8	(1.8)	—	密	10Y5/1褐色	10Y5/1褐色	回転ナデ 天井部、ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転)後ナデ 回転ナデ	
13	須恵器(蓋)	10.7	(1.6)	—	密	N6/灰色	N6/灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転)後ナデ 回転ナデ	
14	須恵器(蓋)	7.6	5.0	—	密	N5/灰色	N6/灰色	ナデ	ナデ	外面: 沈紋、列点文 内面: 繋り跡あり
15	須恵器(蓋)	9.5	3.6	—	密	N5/灰色	N6/灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右回転) 回転ナデ 天井部、ヘラケズリ後 ナデ	外面: 沈紋、列点文 内面: 繋り跡あり
16	須恵器(蓋)	10.0	3.6	—	密	N6/灰色	N5/灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ(ロク 口右天井部、ナデ回転) 天井部、右方向のヘラ 切り後ナデ	口縁部歪む
17	須恵器(蓋)	9.9	2.3	—	密	2.5Y7/1灰白色	2.5Y7/1灰白色	回転ナデ	回転ナデ 天井部、右方向のヘラ 切り後ナデ	
18	須恵器(蓋)	10.5	4.4	—	密	2.5Y5/1灰褐色	N5/灰色	回転ナデ	回転ナデ 後ナデ 天井部、右方向のヘラ 切り	
19	須恵器(蓋)	9.7	(2.7)	—	精良	N5/灰色	N5/灰色	回転ナデ	回転ナデ	沈線

番号	器種	法寸(cm)			胎土	色調		形態・手法の特徴		備考
		口径	器高	底径		内面	外面	内面	外面	
20	須恵器(壺)	10.7	(3.7)	—	精良	N6/灰色	N4/灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ(ロク口左回転)、回転ナデ	自然釉 沈線
21	須恵器(壺)	10.1	2.5	—	密	N6/灰色	N7/灰白色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ 天井部、右方向のヘラ切り後ナデ	
22	須恵器(杯身)	11.3	3.3	—	密	N6/灰色	N7/灰白色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ 底部、右方向のヘラケズリ	
23	須恵器(杯身)	8.4	3.6	—	密	N7/灰白色	N7/灰白色	回転ナデ	回転ヘラケズリ(ロク口左回転) 回転ナデ 底部、左方向のヘラケズリ後ナデ	
24	須恵器(杯身)	9.9	4.2	6.5	密	2.5Y7/1灰白色	10Y5/1灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	底部外面、右方向の回転ヘラケズリ後ナデ
25	須恵器(杯身)	10.0	3.0	7.5	密	N6/灰色	N7/灰白色	回転ナデ	回転ナデ	底部外面、右方向の回転ヘラケズリ後ナデ
26	須恵器(杯身)	8.8	(2.1)	—	密	5Y6/1灰色	Y6/1灰色	回転ナデ	回転ナデ	
27	須恵器(杯身)	9.4	(3.6)	—	密	N6/灰色	N5/灰色	回転ナデ	回転ナデ	底部外面、ヘラケズり後ナデ
28	須恵器(杯身)	10.0	3.6	5.8	やや密	2.5Y5/1灰白色	5Y5/1灰色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ(ロク口左回転)後ナデ	底部外面、左方向の回転ヘラケズリ後ナデ
29	須恵器(杯身)	—	(1.1)	6.0	密	5Y6/1灰色	2.5Y6/1灰黄色	回転ナデ	ケズリ	
30	須恵器(杯身)	—	(1.3)	8.0	密	3Y6/1灰色	5Y6/1灰色	回転ナデ	ケズリ(ロクロ左回転)	
31	須恵器(杯身)	—	(2.1)	8.6	密	SY5/1灰色	5Y6/1灰色	回転ナデ	回転ナデ	底部外面、右方向の回転ヘラ切り
32	上師器(高杯の脚部)	—	(7.9)	10.2	密	SYR7/6褐色	SYR7/6褐色	ナデ	回転ナデ	
33	須恵器(壺の口)(縁部)	13.4	(4.2)	—	密	5Y4/1灰色	N4/灰色	回転ナデ	回転ナデ	口縁部並む
34	須恵器(長身高杯)	12.3	16.3	12.2	密	N5/灰色	N4/灰色	杯部…回転ナデ・ナデ 脚部…回転ナデ	回転ナデ	3方向透かし(2段・長方形)
35	上師器(壺?)	—	—	—	密	SYR6/4に近い 墨色	YR8/3淡褐色	ナデ	平行タキ後ハケ(10調整は須恵器に似る 条件: 2.2cm)	燒成方法は土師器に似る
36	円筒埴輪	—	—	—	やや密	YR5/4に近い 赤褐色	SYR6/4に近い 赤褐色	ナデ後ハケ	ナデ	
37	須恵器(台付壺)	9.8	15.8	11.6	密	10YRS/1褐色	10YR7/1灰白色	回転ナデ	回転ナデ・波状文	4方長方形の透かし穴。肩部以下に二次燒成のためか發泡あり。
38	須恵器(壺)	6.5	(10.2)	—	密	N6/灰色	N6/灰色	回転ナデ	カキ目、回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)、回転ナデ	外側、列点文
39	須恵器(壺)	—	(7.2)	—	密	N6/灰色	N7/灰色	回転ナデ	回転ナデ	自然釉
40	須恵器(壺)	19.9	(6.3)	—	密	N6/灰色	2.5Y6/2灰黃	回転ナデ	回転ナデ	外側…平行タキ 内向…同心円の当て具

番号	器種	法量(cm)			胎土	色調		形態・手法の特徴		備考
		口径	器高	底径		内面	外面	内面	外面	
41	須恵器(盃の口 縁部)	8.5	(5.2)	—	密	7.5Y4/1	灰色7.5Y3/1 オリーブ褐色	同軸ナデ	回転ナデ	外面部…沈線
42	須恵器(盃の口 縁部)	9.8	(6.1)	—	やや密	N5/灰色	N5/灰色	回転ナデ	回転ナデ	
43	須恵器(平底)	—	(11.5)	—	密	N5/灰色	N6/灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ(ロク ロ右回転)・回転ナデ	円盤充満あり
44	須恵器(縁台)	—	(2.2)	8.1	密	N5/灰色	N6/灰色	回転ナデ	回転ナデ	
45	土師器(杯)	11.9	3.1	6.6	密	5YR6/6橙色	5YR6/6橙色	同軸ナデ	回転ナデ	底部外面…ヘラ 切り後ナデ
46	須恵器(縁台)	—	—	—	精良	N5/灰色	N5/灰色	回転ナデ	回転ナデ	沈線(4条)、列点文
47	土師器(杯)	11.8	4.4	7.4	密	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	ナデ	回転ナデ	結晶片岩を含む 底部外面…板状圧痕
48	土師器(杯)	12.6	3.7	7.6	密	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	結晶片岩を含む 底部外面…板状圧痕
49	土師器(杯)	11.9	4.5	7.3	密	2.5YR5/6 明赤褐色	2.5YR5/6 明赤褐色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	結晶片岩を含む 底部外面…ヘラ状工具 でナデ圧痕
50	土師器(杯底部)	—	(3.9)	8.0	密	YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	ナデ	ナデ	結晶片岩を含む 底部外面…ヘラ切り 後ナデ
51	土師器(杯底部)	—	(3.9)	8.0	密	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	結晶片岩を含む 底部外面…ナデ
52	土師器(杯底 部)	—	(3.3)	7.5	密	7.5YR5/6赤褐色	7.5YR5/6赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	結晶片岩を含む 底部外面…ナデ
53	土師器 (ミニチュア)	2.4	(5.1)	4.2	密	2.5YR6/6橙色	2.5YR6/6橙色	ナデ	ナデ	結晶片岩を含む 底部外面…ナデ
54	土師器(杯)	11.7	3.0	8.0	精良	7.5YR6/6橙色	5YR7/4にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	結晶片岩を含む 底部…焼成後の穿孔、 ヘラ切り後板状工具 でナデ
55	土師器(皿)	7.9	1.4	6.5	密	2.5YR6/6橙色	2.5YR6/6橙色	ナデ・回転ナデ	ナデ	結晶片岩を含む 底部外面…左方向の ヘラ切り後ナデ
56	土師器(杯)	13.0	3.3	7.1	密	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	ナデ	回転ナデ	結晶片岩を含む 底部外面…板状圧痕
57	土師器 (ミニチュア、 鉢の把手)	—	1.5	—	密		5YR5/6明赤褐色		ナデ	
58	弥生土器(盃の口 縁部)	30.0	(4.9)	—	密	7.5YR6/4にぶい 橙色	7.5YR6/3にぶい 褐色	磨耗が激しく調整不明	磨耗が激しく調整不明	口縁部彫部、3条の 凹線、刻み目、黒斑
59	弥生土器(底部)	—	(1.0)	3.0	密	5YR6/4にぶい 橙色	7.5YR5/4にぶい 褐色	ナデ	ナデ	結晶片岩を含む
60	弥生土器(底部)	—	(2.9)	4.1	やや密	7.5YR7/4にぶい 橙色	10YR4/2灰青褐色	ナデ	ハケ	結晶片岩を含む
61	土師器(瓶)	19.0	(4.5)	—	やや密	5YR5/4 にぶい褐色	5YR6/4 にぶい橙色	ハケ	磨滅激しい	
62	土師器(瓶)	15.8	(6.2)	—	密	5YR6/6橙色	5YR6/6橙色	ミガキ	ミガキ	
63	土師器(杯)	14.1	(3.0)	—	密	2.5YR5/6 明赤褐色	2.5YR5/6 明赤褐色	ナデ後ミガキ	ナデ?	

番号	器種	法量(cm)			胎土	色調		形態・手法の特徴		備考
		口径	器高	底径		内面	外面	内面	外面	
64	黑色土器(椀)	13.2	(4.7)	—	密	5YR2/1黒褐色 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	ミガキ	ナデ	
65	土師器 (高台付杯)	—	(3.0)	—	密	2.5YR6/6橙色	2.5YR6/6橙色	ナデ(板状工具使用)	ナデ	

番号	分類	法量(cm)			胎土	色調		形態・手法の特徴		備考
		現存長	現存高	底径		内面	外面	内面	外面	
66	鉄製品	10.1	0.8	—						
67-1		5.9	—	—						
67-2		2.0	—	—						
68		6.8	1.0							
69		5.0	0.6	—						
70		5.2	0.4	—						
71		3.8	0.9	—						
72		2.8	0.9	—						
73		3.0	0.4	—						
74		3.3	—	—						
75		3.7	0.4	—						
76		2.3	0.3	—						
77		2.0	0.3	—						
78		1.9	0.4	—						
79		2.0	0.3	—						
80		2.3	0.3	—						
81		1.4	0.4	—						
82		1.6	0.3	—						
83		1.3	0.3	—						
84		1.4	0.4	—						
85	セラミック	2.0	0.2	—						
86		1.9	0.2	—						
87		1.0	0.2	—						
88	金環	—	0.4	2.0						
89	カラス小玉	0.4	—	0.45						
90	貨幣(寛永通宝)	—	—	2.2						
91		—	—	2.2						

写 真 図 版



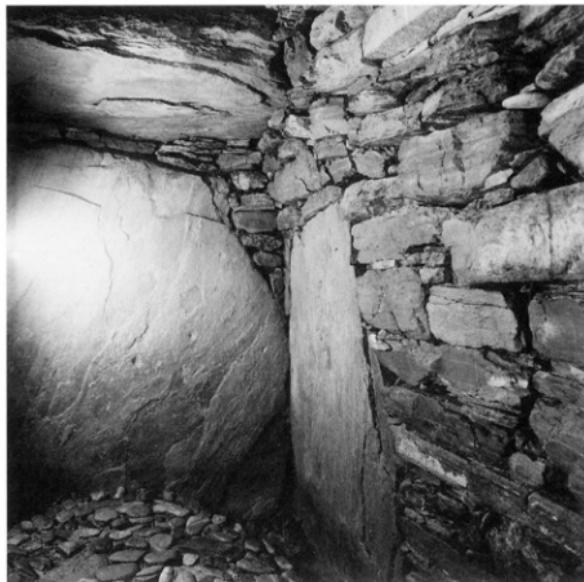
古墳遠景（南東方向から）



石室開口部（南から）



玄室・前室（南から）



玄室の東側壁・奥壁（南から）



玄室の西側壁（南から）



玄室・前室の東側壁（北から）



玄門石、前室、玄室の東側壁（北から）



第1運搬面全景（西から）





前室床面の遺物出土状況
(写真の左側が玄室側、
右側が羨道部側)



須恵器出土状況



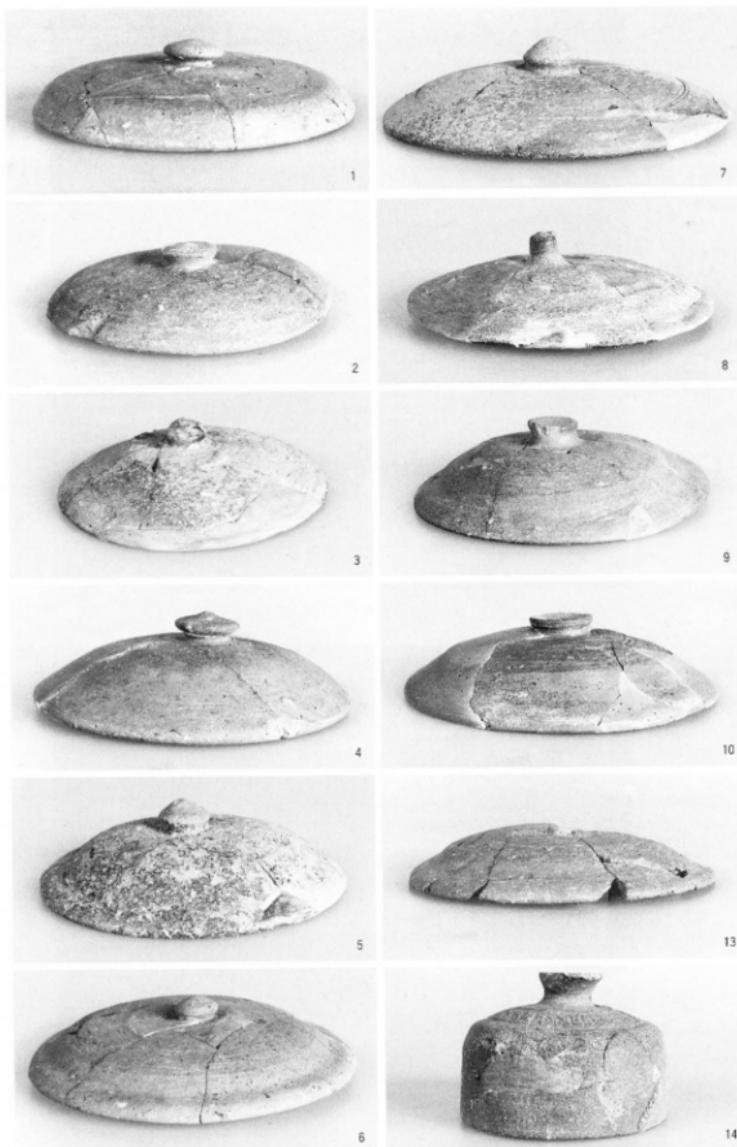
金環出土状況



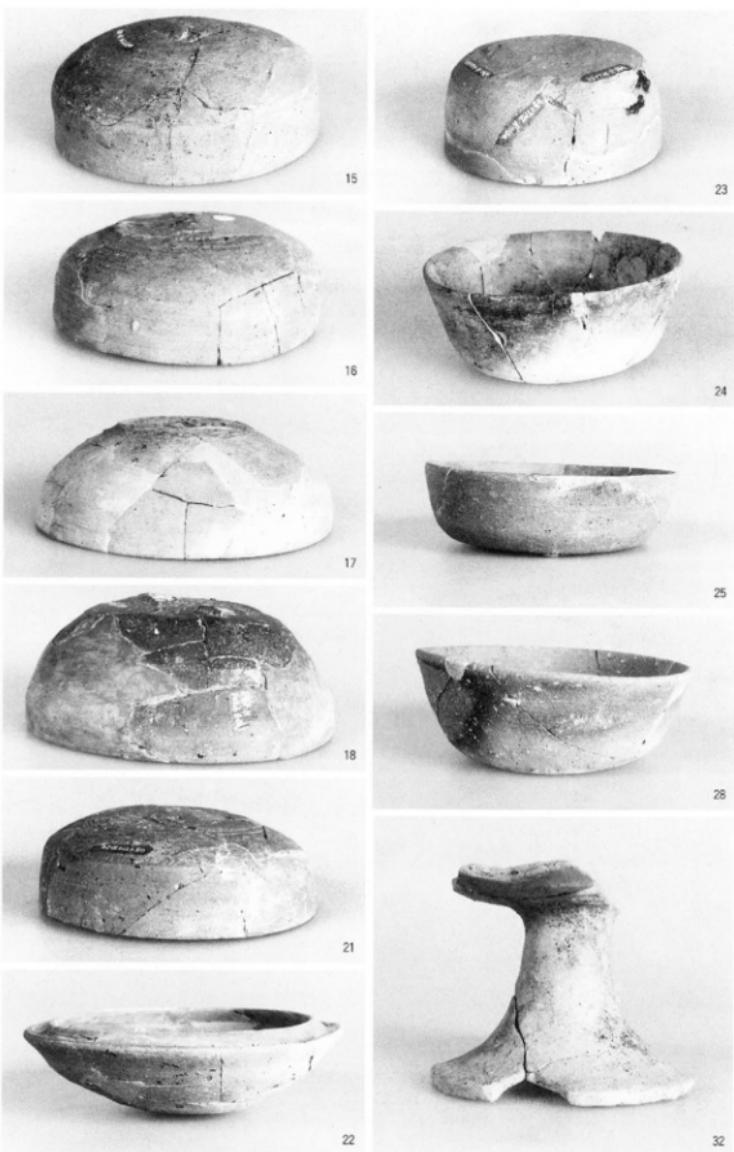
第1 トレンチ土層 西壁面



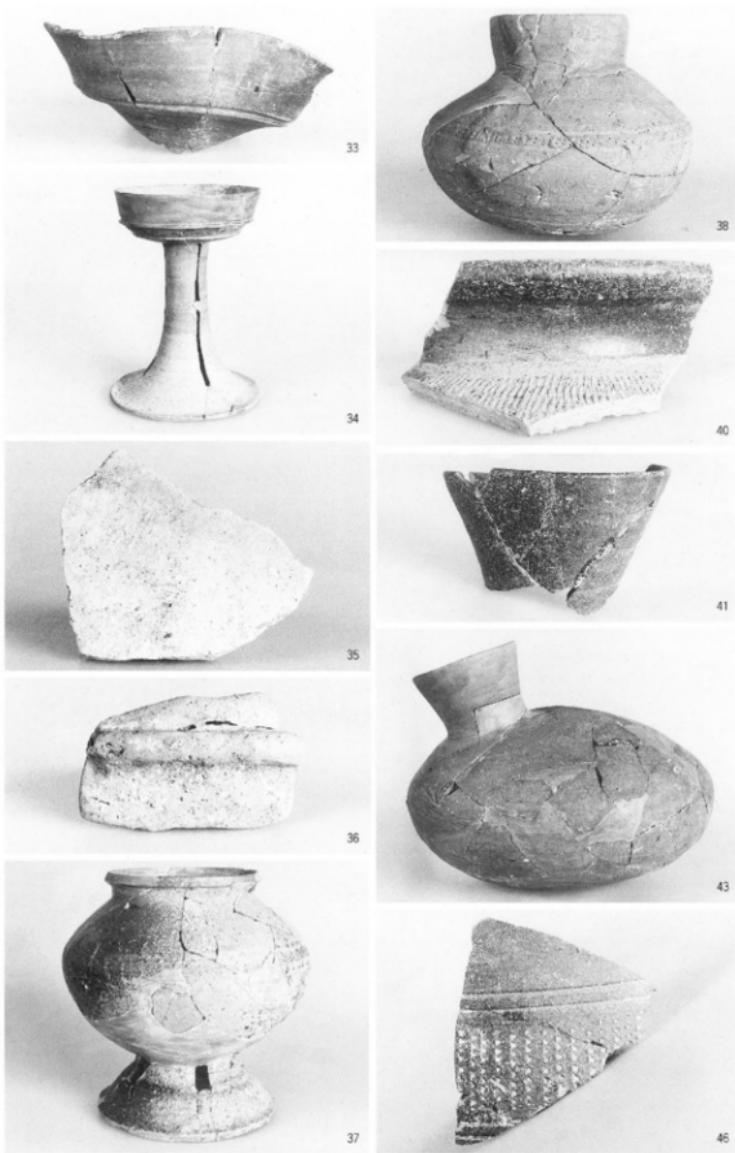
第2 トレンチ全景（西から）



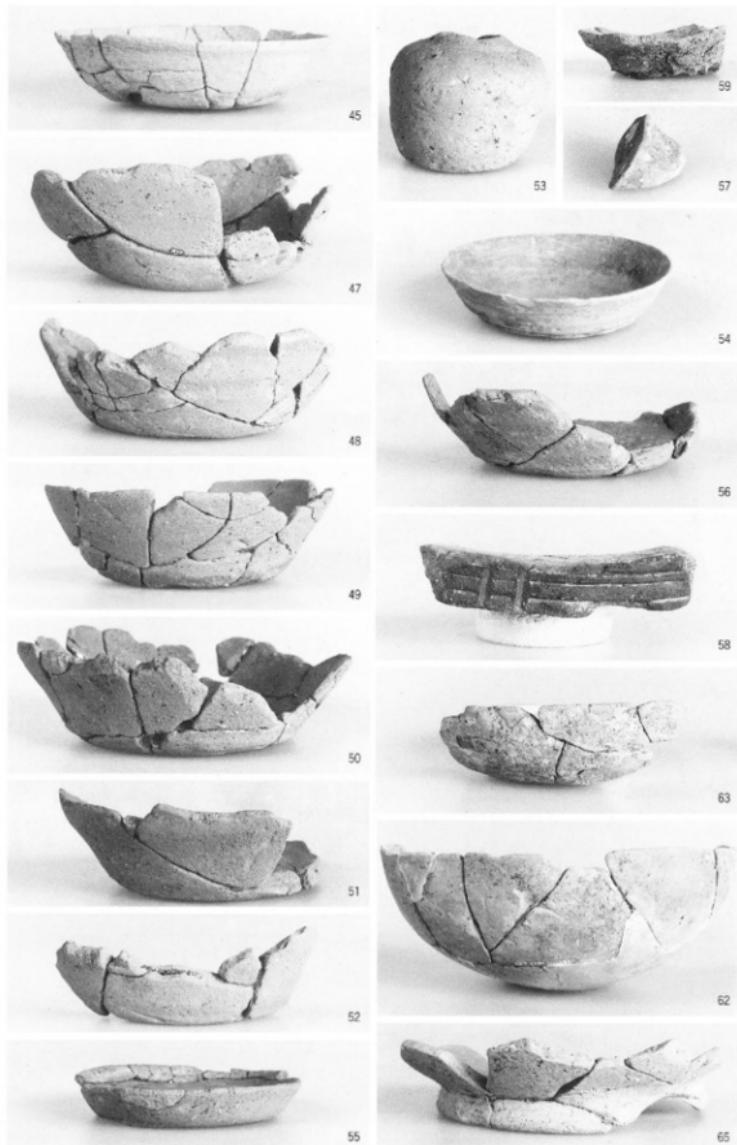
出土遺物（1～10、13、14、番号は実測図に同じ）



出土遺物（15~18、21~25、28、32、番号は実測図に同じ）



出土遺物（33～38、40、41、43、46、番号は実測図に同じ）



出土遺物（45、47~59、62、63、65、番号は実測図に同じ）

徳島県徳島市 矢野の古墳 発掘調査報告書

—平成15年度徳島県緊急地域雇用創出特別基金事業による確認調査—

2004年3月31日 発行

発行 徳島市教育委員会・徳島市史跡調査整備委員会

編集 徳島市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社教育出版センター